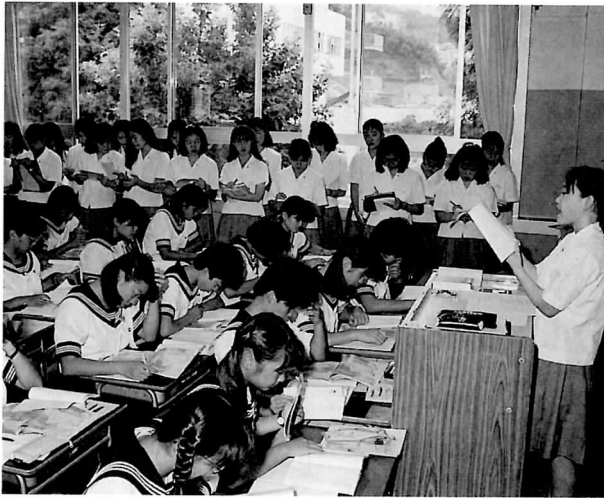


「かけそば」考

——失ってはならない大切な心——

「か け そ ば」考

昨年度、私は、広島大学文学部で、中国古代中世思想史の演習を担当した。その間、中哲研究室の諸先生、また、学生諸君から、温かい配慮をうけ、ほのぼのとした喜びを味わったが、それにもまして感動を覚えたのは、S教授から渡された一箱のチョーク入れを手にした時であった。それは、高価なものだったからではない。それどころか、そのチョーク入れは、もう、誰も使わない古い木製のものなのである。ところが、そのふたには、見覚えのある懐かしい「池田」の文字が墨書してあるではないか。「池田」とは、私にとって、至高の学恩ある恩師池田末利先生のことである。その由緒あるチョーク入れを用意して、S教授は、教室まで足を運び手渡しして下



比治山女子中学校での国語科教育実習風景

さったのであった。私は、その心温まる氣くばりに、胸の熱くなるのを覚えたのである。

ところで、「一箱のチョコレート入れ」ならぬ「一杯のかけそば」が、いま、巷で話題になっている。国会にも登場し、新聞の投書欄にも度々取り上げられているこの童話は、おそば屋さんの、貧しい母子を思う温かさ、その温かさをいつまでも忘れない母子の心情をえがいて余す所無く、よって、全国津々浦々まで感動を呼んできた。ところが、最近、その作者栗良平氏の過去が、週刊誌の探索であばかれ、「うらぎられた」「ひどい作家だ」とて、評価は一転し、手きびしい悪口さえ受けておられるのである。しかし、かりに、同氏が、週刊誌等にある通りの過去を持つ人物だとしても、そのことで、「一杯のかけそば」なる童話の価値が低下するとは考えられない。

思うに、人間は、誰しも、公にしたくない過去を持っている。生来、不完全な存在だからである。だから、例えば、現代の生んだ最高の思想家の一人、田辺元氏が、『懺悔道としての哲学』を著わされたのも、そうした過去があったからのことであろう。ここからしても、過去を懺悔し、今日を感謝して生きていくとするならば、神は、必ずやこれを許し、未来に希望の光を与えて下さるに違いない。「一杯のかけそば」という童話も恐らく、栗良平氏の、懺悔と感謝の生活の中から生れた作品ではなからうかと思う。何故なら、それは、私達読者に、「思いやり」という最も大切な光を与えてくれているからである。

こうして、私は、「一箱のチョコレート入れ」に胸せまる感動を覚えたが、「一杯のかけそば」にも熱い思いの感動を覚えた。それは、そこに、私達日本人の失ってはならぬ大切な心が秘められているからではなからうか、と私は考えている。

同窓会部会だより(平・元・9・1)